病院図書室　19(1):15-17, 1999

講演：近畿病院図書室協議会名古屋地区勉強会

レファレンスの基本と考え方

－情報環境の変化のなかで－

山崎　茂明

1．松阪の街で

松阪中央病院での近畿病院図書室協議会の主催による名古屋地区勉強会で話すきっかけは、1998年7月31日の同協議会の87回研修会で講演したからでした。コクラン共同計画とEBMについて、データベースの制作と利用に引きつけて1時間ほどの講演を終え、夕食会に参加させてもらいました。そこで、名古屋地区での勉強会の企画が進んでおり、森川さんから講師役を打診されました。

松阪は個人的に関心のある街でした、本居宣長の盲目の長男である春庭の生涯をまとめた足立巻一氏の「やちまた」の土地でもあり、訪問したいと思っていました。また、1998年の4月から愛知淑徳大学に転職しており、名古屋地区の病院図書室の方々と知り合いになる機会と考えました。勉強会の当日の午前中に、宣長記念館と樹敬寺にある本居家の墓に行ってきました。背丈ほどの土塀に囲まれた明るい陽光のふりそそいだ墓地の一角に本居家の墓があり、春庭と妻のいきの墓は同じぐらいの大きさで並んでいました。見下ろした墓石は小型のものであり、静けさが切りとられたようなとても安らかな雰囲気でした。大学者を祭るといった感じや、ましてや国粋的な様子はまったくありませんでした。松阪の街角から、春庭と妻のいきが歩いてきても不思議は無いような、過去の時間が連続し現在も息づいているようです。記念館では、宣長自身が書き込みをし付箋を貼りながら読んでいた日本書記を眺めることができました。こうして本を読み勉強していたのだと、当時の様子が偲ばれました。本居宣長や春庭の資料をこの街と離れて眺めても、それでは十分でないという思いを新たにしました。

2．情報環境の変化のなかで

病院図書室は、院内の医療専門家を対象にしてサービスを提供してきました。所蔵するコレクションに限りがあり、文献の相互利用は重要なキーとなるだけに、地域の医学系大学図書館や病院間のネットワーク形成がポイントになります。Medlineや医学中央雑誌などの文献データベースや二次資料の利用は、質の高い臨床情報の収集に欠くことのできない情報源であり、近年のCD-ROM版による検索指導などは、レファレンス業務の中心です。病院図書室はほとんど1名程度の図書館職員しかいないかもしれませんが、マニュアルを置いておけば良いというものではありません。最初はスムーズにいかなくても、実際の検索に立ち会い、利用者のニーズに適した検索方法を助言してほしいものです。Medlineデータベースや医学中央雑誌についての基本的な理解に裏打ちされた検索戦略を示すことで、利用者からの信頼を得られるでしょう。また、実際の検索場面から、研修医などの若手医師、看護職、専門医などの職種によるニーズの違

やまざき　しげあき：愛知淑徳大学文学部図書館情報学科助教授

い、共通する操作上の問題点などを整理し、グループ単位の講習会などに活かせるでしょう。院内の利用者は、限られた人数であり、例えば1日1名に20分前後の利用指導をしたら、1年で200名以上に教えることになります。また、検索リテラシーの高い利用者は、同僚の検索指導をしてくれるはずです。図書室担当者の専門能力を発揮する場面として考え、積極的に取り組むべきです（図1）。

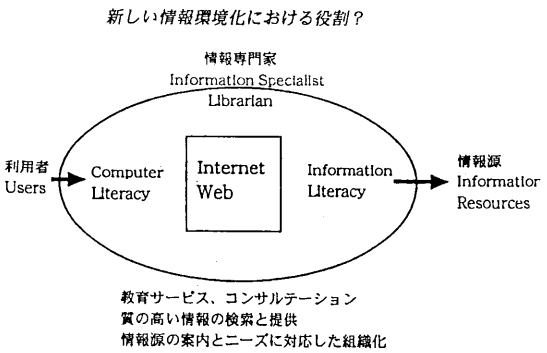


図1

Medlineデータベースは、近年特に、出版タイプのフィールドをもちいて、EBMの視点からエビデンスの明らかなランダム化比較試験の文献だけにしぼることができます。また、出版倫理の視点から撤回された論文や誤りを含んだものを特定できます。つまり、Medlineは質や倫理の視点から文献情報を選択できるフィルターとして機能しており、出版タイプからの検索の重要性を理解している必要性があります。従来のMeSHとサブヘディングをもとにした検索だけでなく、出版タイプも利用していくことです。例えば、GuidelineやPractice Guidelineといった出版タイプをもちいて、スタンダードとなるような治療方法を特定できます。

また、1997年6月から米国国立医学図書館(NLM)によるFree Medlineサービスが、PubMedとInternet Grateful Med(IGM)というふたつの検索システムにより提供がはじまりました。従来の検索コマンドをあまり意識することなく、検索画面を見ながら行うメニュー方式になっています。 Internet Grateful Medは、Medlineだけでなく、AIDSLINE(エイズ)、BIOETHICSLINE(生命倫理)、HealthSTAR(保健医療)、HISTLINE(医学史)、TOXLINE(毒物情報)などのさまざまなデータベースを同じ検索方法で利用できます。PubMedは、Medlineデータベースを中心にして遺伝子情報や電子ジャーナルとのリンクなど意図した実験プロジェクトとして始まりましたが、今後検索システムの主流になるでしょう。PubMedの検索には、基本検索(Basic Search)とアドバンス検索(Advanced Search)のふたつがあり、さらに質の高い臨床情報に絞る際に使用するClinical Queriesなどがあります。基本検索では、思いついたキーワード、著者名、雑誌名などを、スペースをとって連続的に打ち込むだけで、システム側で適切な文献を検索します。キーワードの選択、著者名や雑誌名などの識別などが、見えないところで自動的になされていきます。そして、読みたい文献を見つけだしたら、そのRelated Articlesボタンをクリックすると関連の深い論文を表示させることができます。この機能は、Internet Grateful Medにもあり、新しい有効な検索方法です。

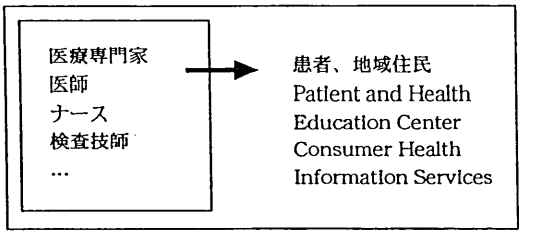
3．一般の人々への情報サービス

PubMedに代表されるインターネットによるFree Medlineサービスがもたらした影響のひとつに、専門家と一般の人々への研究情報の提供に壁をなくしたことがあります。さらに、NLMはMedline plusを開始し一般向けの健康医学情報の提供も始めました。これらの事実から理解できるのは、医療の質をあげるためにも一般の人々への医療情報の提供と自分自身で調査することのできる情報源の形成がポイントです。病院図書室も、専門家を利用対象者とするだけでなく、医療サービスの最終的な消費者である一般の人々(非専門家)にたいして利用を広げる必要がありますし（図2）、このことで病院図書室と図書館員の重

要性が院内で形成されるはずです。

病院図書室は、少ない人数で運営されているだけに、組織を越えて学び合い協力していくことが必要になります。つまり、人のネットワークがポイントになりますし、同時に電子ネットワークが大きな力になるでしょう。ホームページにしても、組織の紹介、役に立つリンク集、所蔵目録情報などから始まり、さまざまなマニュアル、利用パンフレット、最近の頻出レファレンス質問集などを蓄積し共有することで、仕事を支えるパワーとなるはずです。

病院と病院図書室の役割の変化
Hospital Library



医療サービスの提供
健康情報の相談、提供、利用の場

図 2

4．信頼感を情報に付加すること

勉強会では、インターネットから無料でアクセスできるようになったMedlineデータベースが、医療専門家の問題解決はもちろんのこと、レファレンスのための情報源や、情報専門家(病院図書館員)の生涯教育に有効なソースになることを、事例をもとに紹介したいと考えていました。例えば、医学史上の人物情報を知りたいというリクエストがあった時、病院図書室にはDictionary of American Medical Biographyなどの人名録はほとんど所蔵していないでしょう。こんな時、Medlineを利用し、出版タイプのBiographyで限定すれば、抄録の読める文献や有名な総合医学雑誌にある記事を見つけられるかもしれません。

また、「情報は人間が伝えてこそ信頼感がでるもの」であることを、この会で伝えたいと思いました。文献情報を例に考えてみましょう。糖尿病についてMedlineから50件をリストしたものと、糖尿病についてのレビュー論文にあげられた50の文献リストでは、件数は同じであってもその価値は異なっています。専門家が評価したレビュー論文の文献リストの方がはるかに重要なものです。情報サービスも、専門家が間に入ることで利用者にとって信頼できる情報提供となるはずです。情報やサービスに価値や意味を与えることが、専門家という人間の仕事であると考えています。経営環境の厳しさから、雇用への不安もよぎりますが、情報源とそれを求める人々をつなげる専門家の役割は、情報環境の激しい変化のなかで、より一層重要になると考えています。